



ブラックホールの科学

羽馬有紗 著

ベレ出版 1,785 円+税 191 頁

読み物
お薦め度
☆☆☆☆

私はプラネタリウムで働いているため、一般の方から天文の質問をよく受けます。なかでも「ブラックホールって本当にあるの?」「ブラックホールって何?」という質問は、上位を占めます。

まるで、何もかも吸い込んでしまう得体のしれない黒い穴をほうふつとさせる、この魅力的な名前をもつ天体は、一般の人が理解するにはとても難しい科学です(私も正確に理解しているわけではありません)。

そんなブラックホールの解説を、ガチガチの物理で説明するのではなく、不思議なキャラクターとキュートなイラストで、誰でも気軽に楽しめるのが、本書です。

物語は、1枚の「ブラックホール行き片道切符」から始まります。地球から銀河バスに乗り、戻ることのできないブラックホールへの旅に出発します。

旅の途中では、飽きることない著者独特の表現力による地球や太陽系、銀河、重力の説明、ブラックホールになれる星、なれない星を決定するブラックホール選抜、「庶民」ブラックホールと「暴君」ブラックホールにたとえられる大小ブラックホール、城壁と呼ばれるシュヴァルツシルト半径等、ブラックホールを知るための知識を、著者の独創的な感性で、しかし科学的根拠のある的を得た表現で、にぎやかにたどっていきます。

そしてまもなく銀河中心の「暴君」ブラックホールに近づき、シュヴァルツシルトの城壁を越えたら、チーターよりも速い光の速度でも帰ることはできない……ぞっとするものです。ちょっとそんな雰囲気醸し出しても、あいかわらず著者のあっけらかんとしたペースで続きます。

いよいよ、「暴君」ブラックホールに近づくと、われわれの目に広がる、通常と違う相対論の世界が、著者の独特なイラストとともに描きだされて

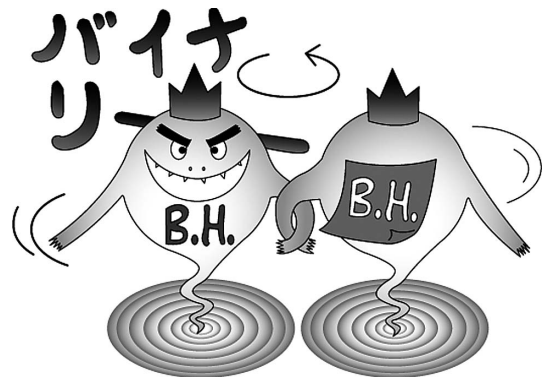
いて、ブラックホールの不思議さ、そしてその魅力を増す内容でした。

脱力するほどのマイペースさ、下手すると、ふざけていて滑稽。そしてその奥に怖さをも潜むのに、いつも愛らしく楽しくて憎めない。そう思えるのは著者が子ども時代から純粋に、ブラックホールに興味をもち、真剣に向き合った本気が、そこに詰められているからではないか。

読み手は自分の考えの及ばない、自分ではできない、突拍子もない表現力に、そして、その本気に、魅力を感じるものではないでしょうか。

ブラックホールを難しいもの、ではなく、魅力的なままに、構えることなく読み進められる本書は、プラネタリウムを訪れる「ブラックホールって何?」と質問してくる一般の方々にも、また、真剣に天文学を研究されているの方々にも、ふと肩の力を抜き、視点をほどく一冊であると思います。

菊川真以 (つくばエキスポセンター)



本書に登場するブラックホールのキャラクターを、評者菊川が真似て書いてみました。ぜひ本書を手にとって、キュートな著者のイラストをご覧ください。